

イノベーションと流動性 —企業の成長と脱成熟のジレンマ—

清水 洋
山口 翔太郎
金 東勲

目 次

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. はじめに | 5. 流動性を上げると低い水準にとどまるイノベーション |
| 2. メンバーの流動性と新規性 | 6. 終わりに |
| 3. 年をとると収益性が落ちるのか | |
| 4. イノベーションのジレンマは問題にはならない | |

人材の流動性の上昇は、イノベーションにどのような影響を与えるだろう。これは、長期的な雇用慣行が変化していく中での日本企業を考える上で重要になる。これまでの研究から、流動性の上昇は、チームレベルや企業レベルでのイノベーションを促進することが明らかになっている。更に、流動性が十分に高まれば、イノベーションのジレンマも社会的には大きな問題とはならなくなる。しかし、流動性が高まっていくと、イノベーションの重要な源泉である汎用性の高い技術が育たなくなる可能性がある。



清水 洋 (しみず ひろし)

一橋大学大学院経営管理研究科・イノベーション研究センター教授。2007年London School of Economics博士、08年Eindhoven Technology University博士研究員、08年、一橋大学イノベーション研究センター、専任講師を経て、17年4月より現職。『ジェネラル・パーパス・テクノロジーのイノベーション：半導体レーザーの技術進化の日米比較』において16年度に日経・経済図書文化賞、17年度に高宮賞を受賞。



山口 翔太郎 (やまぐち しょうたろう)

一橋大学大学院経営管理研究科博士後期課程在学。2016年一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。現在、研究開発人材の流動性とイノベーション、産業の成長との関係について、実証的な分析を行っている。



金 東勲 (キム ドンフン)

一橋大学大学院経営管理研究科特任講師。2018年一橋大学大学院商学研究科博士課程修了、18年4月より現職。博士(商学)。現在、創造性の高い成果を生み出すチーム及び企業はどのような活動を行い、それに影響を与えるのは何かについて実証的な分析を行っている。